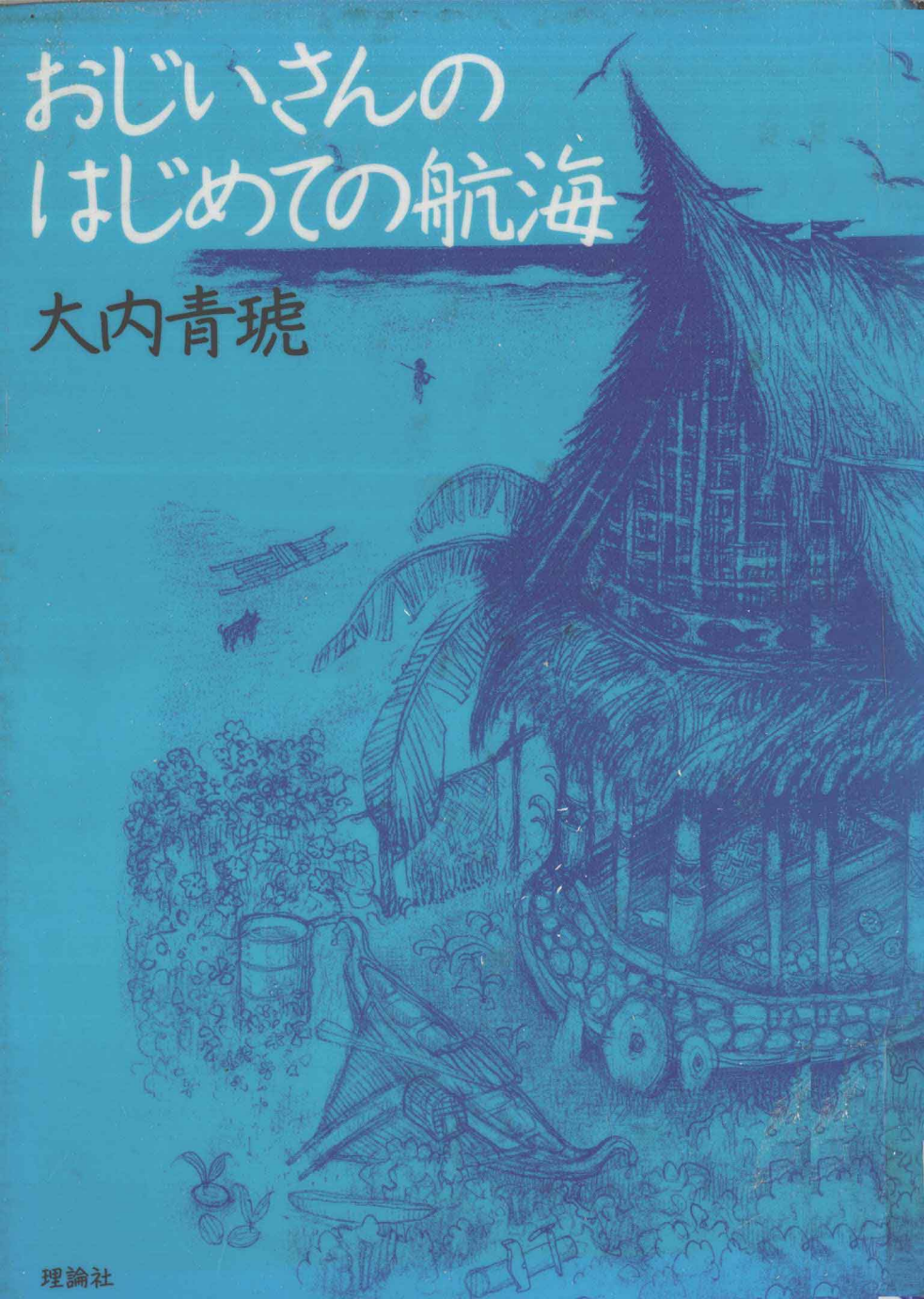
おじいさんのはじめての航海

大内青琥



理論社

著者紹介

1939年東京に生まれる。
画家。79年初めてヤップにわたる。その後、日本とヤップの往復の中で、この10年をすごす。
著書に「ヤップの島の物語」(朝日新聞社)がある。

地平線ブックス

おじいさんのはじめての航海

一九八九年一月　初版
一九八九年一月　第一刷

著　者／大内青琥(おおうちせいこ)
制　作／小宮山量平
発　行／山村光司
発行所／株式会社理論社
162　東京都新宿区若松町一五-六
電話　営業(〇三)二〇二-五七九一
　　出版(〇三)二〇二-五七九四
　　編集(〇三)二〇二-二五七七
振替　東京九-九五七三六
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
印刷・方英社

ISBN4-652-01625-5
©Seiko Ōuchi 1989 Printed in Japan

おじいさんの
はじめての航海

大内青琥

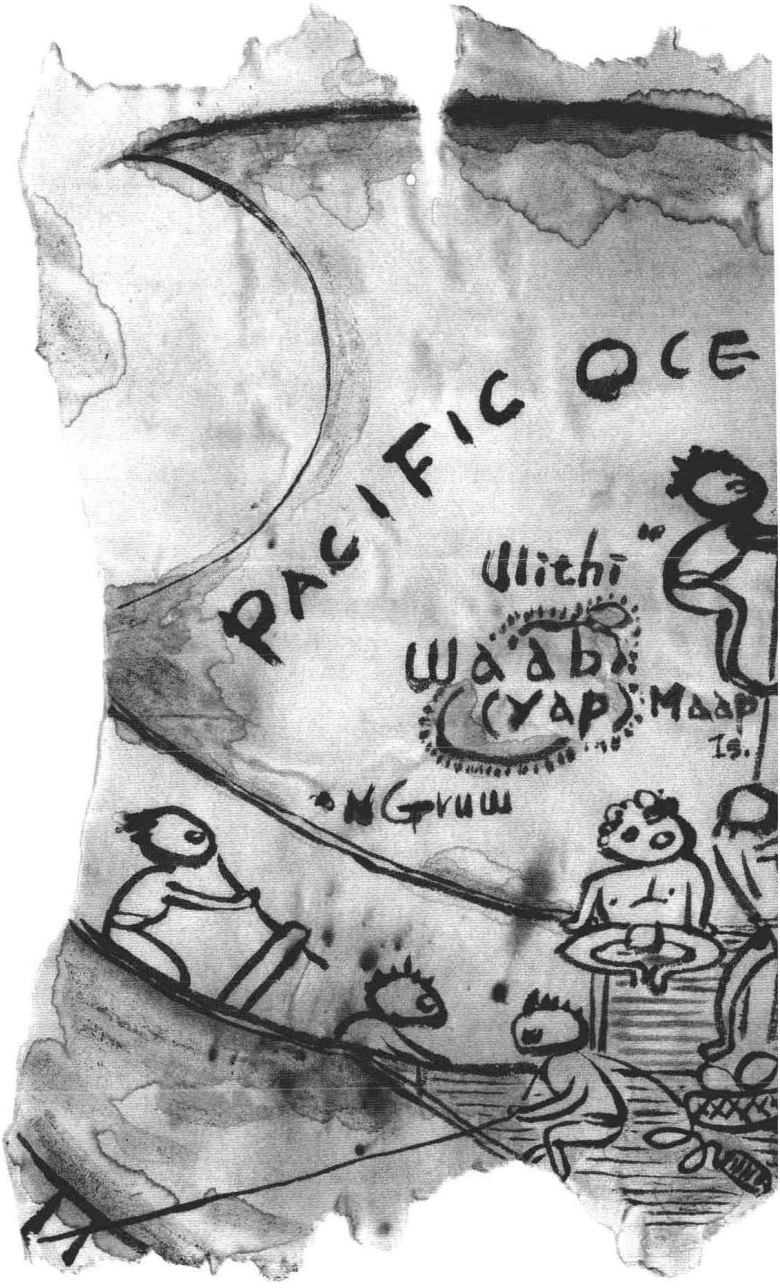
理論社

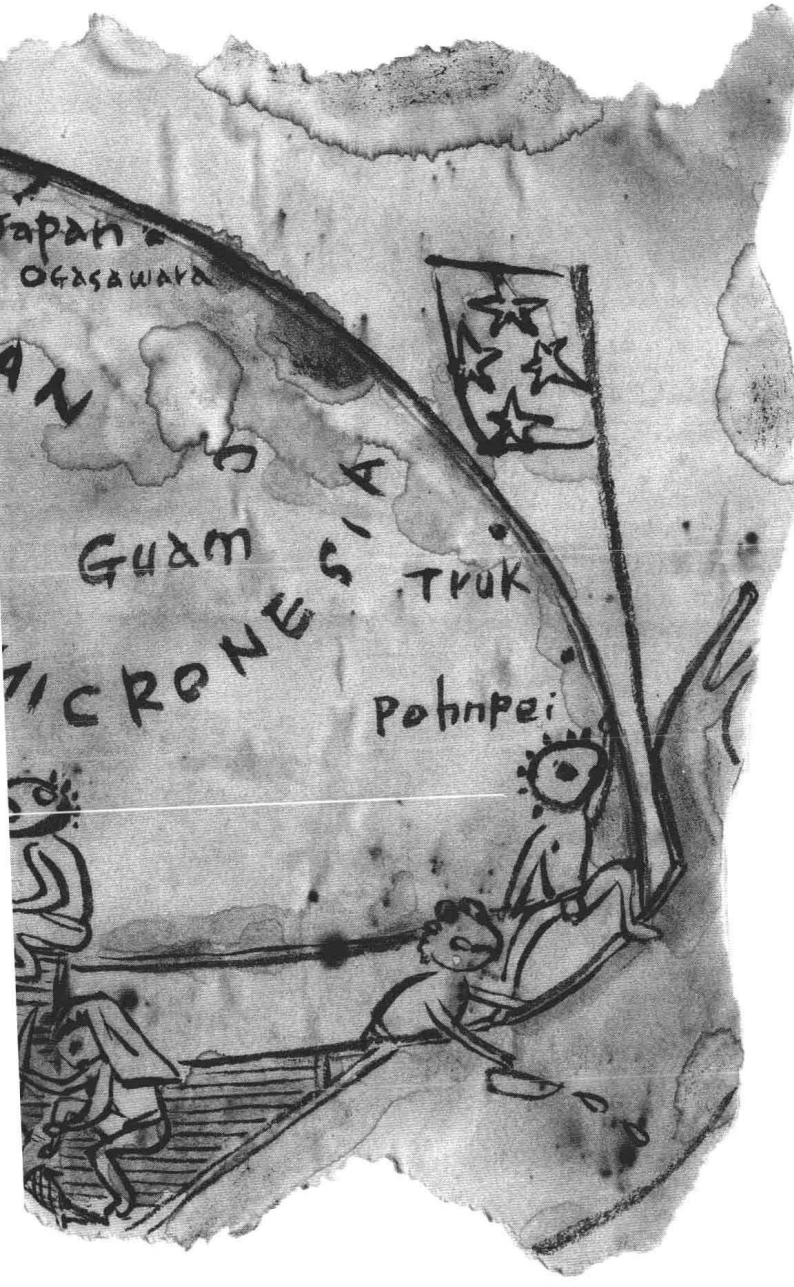
おじいさんのはじめての航海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

物語のはじめに……　11
百歳の木　17
おじいさんのはじめての航海　111
あとがき　248


PACIFIC OCE
Ulithi
Wa'ab
(Yap)
Maap
Is.
Ngulu


Japan
OGASAWARA
AN
Guam
TRUK
MICRONESIA
Pohnpei

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

装幀　平野甲賀
絵　大内青琥

物語のはじめに……

その日は、朝からとても風のつよい日だった。

南の海を一そうの大きなカヌーがちいさな島へむけて、帆走していた。

乗っているのは島の酋長と七、八人の男たち。初めての帆走だ。

買ったばかりの大カヌーを、自分たちの島まで運んでかえるというので、酒も入ってみな上機嫌だ。

「むかし、わしのじいさまはな、タバコがきれると、ちょいとカヌーで葉っぱをとりにいったもんだ。ほんの二、三日でいきつく、となりの島までね」

「酔いざましには、このくらいがちょうどよい風さ」

男たちは大声で冗談をいって笑いながら、サンゴ礁のリーフに沿ったあらい海をはしった。

サンゴ礁の島に暮らす人たちの舟は、リーフの切れめをよく見きわめて内海と外海のあいだを行き来する。水道にはたえず強い潮の流れもあるので、ただリーフに近づいて外海を航行するだけでも、よほどの熟練がないと危険だ。

大きな村の沖にある、この切れめにさしかかったときだ。

「おい、カヌー！　おまえどこへ行くっ」

すっとん狂な声があがった。

「どけっ。どけどけどけどけリーフ！　そこのリーフどいてくれーっ」

どいてくれーったって、そいつは無理だ。

ちょっと油断をしたすきに、カヌーは、おりから満ち潮の強い流れにすいよせられて、たちまちリーフにはげしく、つきあたってしまった。

あっという間もない。

浮き木をささえていた腕木が音をたててふっとぶ。カヌーはバラバラになって、男たちは海へほうりだされた。

みなあわてて、てんでに泳いでどうにか近くの岩礁にたどりついたのだが、酋長だけがなかなか上がってこない。

口々に大声で、風にさからって名前を呼んだ。男たちのなかには、フンドシが流れてすっぱだかの者もいたが、今はそんなことにかまってはいられない。

ようやく、最後のひとりは浮かびあがってきた。

ぶるぶるっと顔をしかめて、やっと目をあけると、右手を高だかとさしあげた。その手には、なんと、カヌーといっしょに沈んだはずの酒壜がしっかりとつかまれていた。

「もったいないからね！　ついでに一本、龍宮城からひろってきたよ」

*

買ったばかりのカヌーを、その日のうちに失ってしまった男たちは、ちかくの村の人たちに助けられた。

奇妙なぐうぜんだが、このカヌーを作った船大工の老人も、カヌーをこわしたリーフからほど遠くない村のひとなのだ。

しかも、〝最後の名人〟といわれるこの老人は、このカヌーをつくりあげると間もなく死んでしまった。老人はカヌーを彫っていたある夕方、ぽつりとこういったのだそうだ。

「こいつがね――、もうじき、わしを遠くへつれてゆくといってるよ」

酋長には、まるで予言のとおり、ほんとうに形見のカヌーが名人大工のあとを追いかけていってしまったようにおもわれてならなかった。

心がおちついてくると、それが不思議だった。

そのうちだんだん、くやしさがこみあげた。老人はさだめし、笑っていることだろう。

――もう誰にも、カヌーなんか手におえないのさ――と。

〝はるばる遠い、遠い島から流れついた遭難者〟に、作りたてのヤシ酒がふるまわれた。バナナの葉に盛ったイモや、ニワトリの骨つき肉がならべられた。ヤシの実の果肉と、トウガラシと、それに島のレモンとをたっぷりまぜあわせた魚のサシミも、バケツいっぱいにはこばれてきた。

島のしきたりで、ヤシのからを二つにわったおわんでヤシ酒がまわされる。みな、すぐいいきげんになった。

そのうちだれかが、大声でいう。

「むかしある船長が、じまんのカヌーで遠い島へはりきって出かけていきました。すぐつきました。となりの村のマングローブのしげみへね」

どっと、みな笑った。

「勇かんな船長はあきらめず、翌朝またカヌーを出したとさ。するとこんどは自分の村の浜辺へついた。村人はきいた『はるばるおまえはどこから来たんだい？』『その……この浜辺からさ』」

客も、あるじも、いっしょになってげらげら笑った。

笑いながら、酋長は、

（――うわさは、島じゅうにひろまるだろうな）と思っていた。

酔いもはやかった。

腹の底から、つきあげてくるいいようのない激しいかたまりのようなものがある。

（若いころは、これでもカヌーを彫ったものさ。そう、ひとりだけだって、りっぱに四そうは仕上げたじゃないか）

ひそかに酋長は自分につよくいいきかせた。

（スミは、頭のなかにちゃんとある）

*

その昔、この酋長の島に、二人の少年がいた。二人は大の仲よしで、名前をマルとギルトマンといった。

ギルトマンはカヌー大工の棟梁バスケスのひとり息子だった。

原木を切りだし、カヌーのかたちにけずりだしてゆくために大切な目やすの線――スミは、島の男たちのしきたりで、えらばれた若者にだけ口うつしでつたえられる。マルは当然、親友のギルトマンが、次のカヌー大工の棟梁にえらばれると信じていた。

ところが、そのギルトマンが、とつぜん重い病気にかかったのだ。

ギルトマンは、いよいよ自分がもう長くは生きられないと知ったとき、父親のバスケスに、どうかマルを枕もとへ呼んでほしい、とたのんだ。

「いっとくけどマル。ぼくはそうかんたんには死なないぜ。もう死ぬからってわけじゃないよ」

力なくギルトマンは笑って、ことばだけは元気なころのように、負けずぎらいな切り出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com